

氏名： 菅 聡子 (KAN Satoko)
所属： 人間文化創成科学研究科文化科学系
学位： 博士 (人文科学) (2000 お茶の水女子大学)
職名： 教授
専門分野： 近代日本文学、とくに明治小説、女性作家
E-mail： kan.satoko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

日本近現代文学／女性表現／ジェンダー／メディア研究／表象分析
Modern Japanese Literature／Woman Writing／Gender／
Media Studies／Analysis on Representation

◆主要業績

総数（9）件

- ・太宰治『女神』論—帝国の亡霊は消滅したか（『太宰治研究』15、和泉書院、平成19年6月、pp57-69）
- ・〈暴力〉の表象／〈表象〉の暴力—欲望の再生産とメディア（竹村和子編『欲望・暴力のレジーム 揺らぐ表象／格闘する理論』作品社、平成20年3月、pp154-168）
- ・〈淫婦〉の恋—『にぎりえ』と『河内屋』の交錯と乖離—（『文学』第8巻第5号、平成19年9・10月、pp142-151）
- ・国家と女学生—東京女子高等師範学校を事例として—（お茶の水女子大学「人文科学研究」第4巻（2007年版）、平成20年3月、pp41-51）
- ・〈よろめき〉と女性読者（『文学』第9巻第2号、平成20年3・4月、pp54-68）

◆研究内容 / Research Pursuits

女性読者とメディアの連関、ならびに戦後状況とのかかわりを中心化し、とくに昭和30年代における女性読者の様相を分析・考察した。また、同じく現在のメディア状況ならびにサブカルチャーの交錯・葛藤・共犯関係を明確にすべく、少女の表象と暴力の連関について論じた。

女性と国民化の問題意識からは、明治期に「国民」たることから排除された女性たち、とくに「娼妓」たちと国家の連関について、さらに、彼女たちとは対極に存在した本学前身の東京女子高等師範学校の学生たちを比較対象しつつ、皇后との関係性を分析軸として、女性がどのように「国民」として教育されたのか、分析・考察を行った。いずれも、研究業績として発表した。

◆教育内容 / Educational Pursuits

学部の授業においては、日本近現代におけるキャノンの批判的再検討の見地から、明治以降、現在にいたるまでの男性表現を時系列的に考察する講義をもった。また、サブカルチャーと現代日本社会の問題を前景化すべく、とくにメディア・リテラシーの獲得を目してジェンダーの観点から全学対象の講義をもった。

大学院においては、女性読者とベストセラー小説の連関、またメディアの成立のプロセスをみる見地から、菊地寛『真珠夫人』を分析対象として、演習と講義をミックスさせた形式の授業を行った。さらに「悪女」表象について分析した。

また、主査として担当する大学院生（含・留学生）に対しては、個々の研究の進展を促すべく、論文指導を中心に、指導をおこなった。また、国内外での口頭発表を奨励した。主査として担当する院生のうち、2名が学位を取得した。

◆研究計画

女性作家の国民国家への参与を分析・考察するにあたり、その「文学的感傷」性を視座として、女性読者との連帯も視野に入れつつ、分析・考察を続ける予定。

また、女性の国民化において、古典文学がどのような役割を果たしたのかについても考察。

◆メッセージ

文学研究は、ともすれば現実社会とコミットしていないと考えられがちだが、それは誤りである。私たちは、つねに「物語」のなかを生き、ときに、より「大きな物語」による抑圧を受ける。そのような抑圧にあらがうために、私たちは「物語」自身のみならず、その「物語」を発信・受容するシステムや、「物語」のコンテクストを読み解く力を持たなければならない。そのような広い意味でのリテラシーを得ることができるのは、文学研究の分野である。そもそも、現在の私たちをとりまき脅かす「大きな物語」の原型は、すべて過去にすでに語られたものなのだ。そのようなアクチュアルな学問の形として、文学研究はある。